教育新宝島

1968 新卒日記

特典 向山洋一 教育資料

No 00

2023 NOV.

本資料について

向山洋一氏（ＴＯＳＳ最高顧問）は、次世代を担う若い先生方のために、手書き原稿、ノート、児童作文、授業構想メモ、手紙、音声テープ、授業映像、自著など、段ボール箱にして、約七〇〇〇箱もの資料を残した。

現在、それら資料の分類・整理の真っ最中ではあるものの、一部をメルマガ「谷和樹の教育新宝島」の特典資料として、会員限定で公開する。

●向山洋一の貴重な教育資料を解説付きPDF冊子にして毎月一回配信予定（三〇ページ前後）

●未公開の向山洋一の映像・音声資料の公開（不定期配信）

さて、向山洋一氏は、一九六八年四月、東京大田区立大森大四小学校に赴任し、三年四組の担任となった。

教師になって、一ヵ月。向山氏は、日々の出来事の中から印象的なことを綴りはじめた。

それらの日記（草稿）は、後年、『新卒日記』として、二四ページの冊子となり、京浜教育サークル（向山が一九六九年に設立した自主的な学習会）で提案されることになる。

今回は、この日記（草稿）および、『新卒日記』（教育実践記録集1）を中心に、以下の資料をお届けする。

(1)『新卒日記』（草稿）1968・1969　向山実物資料 A125-16-01
(2)「週案簿」（新卒一年目）1968　向山実物資料 A33-01-01
(3)『新卒日記』（草稿）1968　向山実物資料 A85-05-01
(4)『新卒日記』（教育実践記録集1）1971　向山実物資料 A74-01-01
(5)「大森大四小学校四年三組学級経営案」1968　向山実物資料 A22-53-01

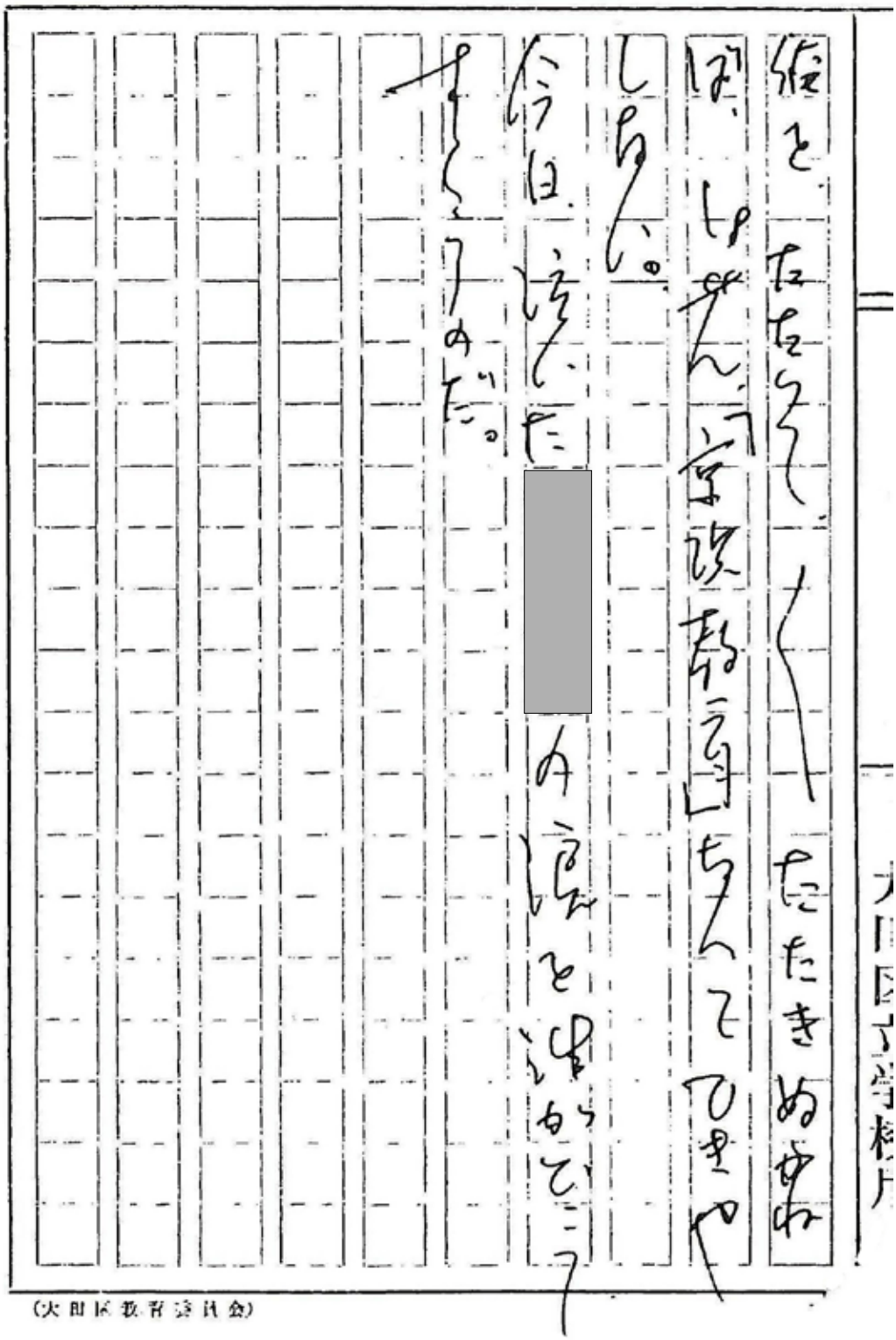
なお、(4)『新卒日記』（教育実践記録集1）は、向山氏のデビュー作『斎藤喜博を追って』（一九七九・昌文社、現『向山洋一の教師修業十年』学芸みらい社）にも一部が収録されている。

新卒時代（1968）の向山洋一

28

やはり実践記録をかけばかけるほど。
「研究」やらに目向いて、ともも書に目向
かなかつた。「子ども」を目ざすとは何
るべきものである。
「子どもを知ること」教育はない。
このことの内容のはげしさを学ぶべく思っている
ばならない。
見やすかけるの教育の現場情ちょっと気
どもに研究を。きとり　はなもちならい

大日文方義雄



彼をたたき、たたきぬいた。
ぼくは、しゃべれない。
[illegible]先生にきいてみる。
しらない。
今日、[redacted]の涙を流がして、
[illegible]のだ。

大田区立[illegible]学校

(大田区教育委員会)

（20 × 20）

ちょっとすまった研究会きょうかしも
不幸なことでしまったと
いうことでした。

大田区立学校用

（大田区教育委員会）

●『新卒日記』（草稿）　一九六八年六月二二日

「見ると見える」ということばを使って短い文を作ってみよう。

やかて、子供たちは元気に発表しました。それを使ってせいりする。

①……東京タワーを見る。

②……東京タワーが見える。

東京タワーのように見える。

秋沢「はあー……、先生。」「見えるには二つのいい方があるみたいです。「が」ついたときは、ほんとうのほんとうに見えた時で、のようにと

（20 × 20）

いうときは、ほんとうはどうか分らないけど、
自分にはそう見えるといういみです。」

◇　◇

同様に、

①車を止める。

②車が止まる。

⇐ □を

①ぼくは止める。

②ぼくは止まる。

（大田区教育委員会）

6月16日 ～ 6月22日

担任印　校長印

音楽	オルガンやハーモニカで正しく演奏させる。 オルガン・ハーモニカ・カスタネット・タンブリン・鈴・木琴を使用して合奏ができるようにする。 ☆木琴4・タンブリン2・鈴2	家庭		道徳	
図工	花 1日1回絵具でつぶれたものがやるようにする。 色紙や身近にある材料を使って自由に想像した美しい花を作る ☆色紙類(色紙・セロハン)モール付はがき・接着剤・画用紙	時間がとれなかった。	走り巾とびの基本技能を身につける。 ☆砂場・ほうき・くまで・石灰 ローテクラブ・ミンゾーを行う。	特活	せきが文を行い、班が学習・生活を通しての集団として・生活単位になるよう話しあう。
				行事	日曜参観(16日)

	金(21日)	土(22日)
1	国語 テスト.	国語 ことばの手引.
2	社会 ヒルマ.	音楽 みんなと (テ)
3	理科 土 3.	算数 もんだい2
4	国語 としょかん.	体育 ローテ. 作手作業.
5	音楽 みんなと	
6		

特記事項

	実施時数	累計時数
国	8	78
社	3	31
算	5	52
理	3	30
音	2	18
図工	0	16
家	0	0
体	3	30
道	0	8
特活	1	12
計		
行事		

第 1 学期　第 12 週

国語	新出漢字.語句を理解する。 頭括型.尾括型の文について理解する。 役者について基礎的な理解をする。 合い図の話のテストを行う。	算数	被減数に空位があり.くり下がりが波及的に3回にわよぶ減法計算を理解する ☆.1000.100.10.10000のカード れんしゅう問題をやり.10000までの計算を定着させる。
社会	森ヶ崎地域の特殊性が工場(工業)地帯であることを押えた上で他の地域の特徴について話あう。 ★大田区地図. ★私たちの大田区.(写真) ★スライド. ★大田区の歴史(写真集)	理科	土のさまざまな特徴について気付かせる。 ★.ねんど.砂.黒土 (☆粒.色.手ざわり) 実験.水のしみ通り方とねばりけ ☆.土(校庭).試験管.台.虫めがね.ロート.

	日/月(16日)	火(18日)	水(19日)	木(20日)
1	国語 光.	社会 森ヶ崎の特殊性	算数 れんしゅう2	算数 テスト
2	算数 三口のたしざん	体育 走り幅とび	理科 (テ) 土1	社会 他地域.地図.
3	因	国語 光の漢字残り.	理科 土2.実験.	体育 走り幅とび
4	躍 曜	算数 ひきざん	国語 語句のいみ.	国語 れんしゅう
5	参観日	学級会		国語 かき方
6				

φ2

●『新卒日記』（草稿）一九六八年六月六月二〇日

1

なだめすかすが一向にききめは

昼休みの終りのチャイムがなった。一緒に遊んでいた子供達に「さあ、教室に入りなさい。」という。遊びざかりの三年生。20分位走っても戻ってこない。

「先生もっと遊ぼう。遊ぼう。」がイクワヤ。

「遊ばないと教室へ入らないから。」

病わている俺はかんしゃくをおこす。

「教室へ入らないなら、そうやっているン」

一言となって教室へ入る。教室へもどったのは女位。集団でストライキを始めた。

（20 × 20）

「先生！ストライキやってる子なんか、ほうっておこうよ。」「先生、ストライキって何ですか？」ここもスワ。うるさい。

「班の人を呼んできなさい。」の

「はーい。」

こうもで3名にふえる。三階の窓から見ると12.3人いる。ふてくされたように ねそべっている。足をけっているもの。なかなかやるわいと思いながら、冷酷にとどめをさす。

「そんなことしていると、お母さんを呼び

（大田区教育委員会）

α.

すぞ!! 早く教室へ入れ。」

又、そろそろ入って来る。遅れたのは2人。

これは、どうやら事務だ。10分位経過をして

むかうにやらす。空の下でけんかをしている

らしいが、むかうにいったらも、手出らで

ひきあげて来る。

そこで、後は1コくまていく。

「おい、もういいだろう。いいかげんにゆに

入れ!!」

都筑と鄭いっしょに入っていった者。さいごまで

（20 × 20）

残った強者男一人女三人。教室へ入って聞く
一番
つみんな。どんなことがあったって教室へ入
らないといたしやないかよ。ひきょうだぞ。」
[illegible]。京浜工業地帯の煙突
きを優はそこに見た。

(大田区教育委員会)

●『新卒日記』（教育実践記録1）　一九七一年五月二七日

新卒日記

教育実践記録1

1971
5.27

大田区大田川
向山洋一

今からちょうど三年前。新卒の当時の日記である。
一九六八年六月二〇日～七月三日までの　二週間分である。三年四組の担任であった。

○子どものストライキ起る○　六月二〇日

昼休みの終りのチャイムがなった。一緒に遊んでいた子供達に、
「さあ、教室に入りなさい」
と、おいたてるようにいった。
遊びざかりの三年生、昼休みの二〇分じゃあ動きたりない。
「先生もっと遊ぼう。」「遊ぼう。」
てんでに、ガヤガヤやって一向に教室に行くけはいがない。俺が前に「いつか遊んでやる」と、いったのをたてにとってせめたてる。

「遊ばないと、教室へ入らないから。」
なだめたり、すかしたり、おどしたりするが、数をたのむ敵はぜんぜん平気なようす。
二十分の遊びで疲れ切っている俺は、ついにかんしゃくが爆発。
「教室へ入らないなら、そうやっていろ!!」
一言どなって、ふてくされた顔で教室へもどった。
俺のあまりのけんまくにおどろいたのか、半分の二十名位はいっしょにもどってきた。中には、俺より早く教室へもどって、席につくものもいる。こういう、小まわりのきくのは大嫌いだから、よけいに腹が立ってプンプンする。
残りの子どもたちは校庭にそのままだ。見るのもしゃくだが、内心不安にもなって、三階の窓からのぞくと、何やらごそごそ相談している。

●『新卒日記』（教育実践記録1）抜粋　一九七一年五月二七日

「教室へ入れよー〃」
窓から大声でどなったが、子ども達はチラッと上を見ただけで、あとは何も反応しない。すぐ、ごそごそと相談を始めている。
「先生！ストライキやってる子なんか、ほっっておこうよ。」
「先生！かまわなければいいんだよ。」
教室の子は、下の子をかりすてごめんだ。やけにつめたくいいやがる。
「先生、ストライキって何ですか？」
「お前え知らないのかよ。」
教室の中も、がヤヤくなりだした。
俺は、班の同じ人を連れてくるよう要求する。
「いいかあ、先生がかんくになっているっていってもいいし、何をいってもかまわないから、同じ班の人を必ずつれてこい。」
「はあーい。」
子ども達はいっせいに俺び出していった。いや一組だけ、相談している所があった。何をいうのか話し合っているらしい。

ぽつり、ぽつりと、てれくさそうに七、八人もどってきた。これで三分の二になった。
窓から見ると、十二、三人残っている。かくされて上を見上るもの。おやみに石をけとばしているもの。ベンチにねそべっているもの。池をのぞいているもの。花だんのふちにのぼっているもの。アカンベーをやっているもの。
そのたくましさに、おりていって抱きしめてやりたいしょう動にかられる。「さすがに、京浜工業地帯の子だ！」と思う。
「だがなあ、お前達には、この程度のことで俺は満足できないんだ。それが本物でなけりゃあなあ」と心に思いつつ、冷静にとどめを刺す。
「よーし、お前達のお母さんを呼びだすからな。そうやっていろ。いやなら今のうちに中へ入れ。」

小学校の三年生に要求するのは、過酷と思いつつ、どうか俺のおどしに耐えてくれよと祈りつつどなった。
親を呼び出すということに大きく動揺した子どもたちは、又ごそごそやり出した。ロケンカもしているようだ。上からは俺が大声でせきたてる。
一人、又一人と玄関に向った。残ったのは四人。それは、俺がはじめて見た偉大な子どもであった。
四人を残して授業を始めた。俺は四人が気にかかって授業にのらない。十分位して又、子どもに迎えにやらす。
ii　あらそいをしているらしいが、もどる気配はない。こないよといって子どももひきあげてくる。
俺は自分ででかけていった。
「おい、もう、いいかげんに中へ入ってくれよ。」
やさしく、子どもにたのみこんだ。
やっと、戻る気になってくれた。最後まで残ったつわもの四人。
男一人に女三人。

5

教室へ入ったとき、その一人[redacted]が、にわっ立ちになって、みんなにさけんだ。

「なんだよみんなは。どんなことがあったって教室へ入らないとあれほど約束したじゃないか、ひきょうだぞー。」

いいながら泣き出し、いい終ったとたん ワーワー泣き始めた。

京浜工業地帯のたくましい息吹きを そこに見て、俺は熱くこみあげてくるものをとどめえなかった。

6

（中略）

○大じしん○　　七月二日

昨日は、めずらしく大じしんがあった。

「先生!!昨日のじしん、すごかったね。」

さっそく、朝から、その話でもちきりである。

「きのうの地しんのとき、みんなのうちはどうでしたー。」

「あのね、テレビの上のね、お人形がね、みんな落ちちゃったんだよ。」
「お母さんと私ね、外にとび出して、お父さんにどなられたんだよ。外へ出るとかえってあぶないんだって。」
「ぼくね、押入れにとびのっちゃった。」
「お父さんだけ、お酒をのんで、平気ですわっていたんだよ。」
「柱時計がね、七時四五分で止まっちゃったんだよ。」
いやはや、出るわ出るわ。俺は途中でさえぎって話す。
「柱時計が止まる位のじしんの大きさを「震度4」というのです。先生も生まれてから始めての経験です。」
「ところで、学校で地震があきたらどうしますか。」
この機会にと、安全教育とやらをやってみる。
「机の下へかくれます。」
と、子どもたちは、一斉にいう。
「それじゃあ、やってみよう。」

もう子供たちは、机の下に入る。
「まだだよ。そーら、グラグラ〜〜。」
子供たちは、ネズミのように机の下にもぐりこむ。ガタ〜〜しあわったところで全体を見まわす。
[redacted]だけが、ゆうぜんといすにすわっている。何事だ。この男は。
「よおーし。[redacted]だけが今、大ケガをしました。もう一度やりなおします。」「そーれグラ〜〜。」
今度も早い。全員が机の下に入るのに三秒である。
[redacted]はと見ると、机の下にもぐらないで、後の掃除道具入れの中にもぐりこんだ。

○テルテルボーズ○　　七月三日

「先生、今日プールに入りますか。」
教室に入るやいなや、突然こう聞かれた。今日から、プールが始まるのである。子供たちは、何日も前から楽しみにしていたのだ。

所が、あいにく朝から小雨が降っている。
昨日も昨日とて、区内めぐりが雨のため延期となったばかりだった。これでは子どもをつかばれまい。二日続きのダブルパンチだ。
「晴れたら、プールへ入るよ」
といったとたん、水の上でゴンゴンやり出した。紙クズを集め、ワラ半紙、ハンカチでテルテルぼうずを作り出したのである。
できるできる、またたくまにミニのテルテルボウズが作られた。大きいの、小さいの、まがっているの、タンザクもいつのまにかつけられている。
それを竹の棒にぶらさげて、窓の外へ出す。
俺は、神妙な顔で、子どもたちにいう。
「では、お天気の神様へ、お願いしよう」
カスタネットを入れる袋をかぶり、両手に鈴を通す。
「さあー、どいたどいた。お天気の神様へのおいのりだ」
いかにも、おごそかにふるまう。ここで笑い出したらだいなしに

なる。大げさに俺はあいのりを始めた。
子どもたちは、窓の外を云いて、いっせいに歌いだした。
〜 テルテルボーズ テルボーズ
いまのすぐ天気にしておくれ 〜
いますぐ天気にと歌い出す。そうだ。明日天気ではあぶないのだ。
ここでも俺は感心してしまう。
何回も歌って、俺があいのりをしていると、五年二組の子が用事でやってきた。俺のへんてこなかっこうを見て、クスクス笑い出す。
俺は、五年二組の子にいって、とびいりでうたってもらう。歌声は、一段と大きくなる。
子供たちは、とび入りに大喜こびだ。
あいのりのきき目はなく、雨は降り続いた。
皮肉なことに、体育の時間がすぎて、四時間目の終りごろから、雨があがり、晴天になりだした。

4　学級歴（担任歴）組がえの有無とその時期等

1年	2年	3年	4年	5年	6年
小出	小出	向山			

5　職業別児童数

会社員	工員	工場経営	公務員	土木建築	商店経営
13	5	9	1	2	2
運輸	漁業	金融	自由業	無職	その他
0	0	0	1	1	2

6　わたしの学級観（学級の実態・興味関心の傾向・集団意識・父母の熱意～学級の特長 ―強い点，弱い点など）

3年の現在の学級になるまでに2回のクラス編成がおこなわれたためか，おちついてしっとりしたような学習態度に欠ける。
学級全体としての集団意識は乏く，遊び（野球）通学班等を通してのグループ化があらわれ始めている。
父母の熱意はまだ分らずにいる。学年始めの学年会には10名程が出席した。それを見た限りでは義務程度ではないかと思われる。
学級の子供達の最大の特ちょうは，子供達の眼が輝いている事である。質素，率直，正直，公平等がこの子供たちのもっているすぐれた点である。

学級経営案　昭和43年度

大森第四小学校　3年4組

担任　氏名 向山洋一 (印)

1　在籍　男 18 名　女 18 名　(5月1日現在)

2　家庭環境

要　　項	男	女	計

3　特に観察指導を必要とする児童

児童氏名	状況 (身体的欠陥、異常・行動性格異常・学習遅進)

つづき

述べた事を中心に行っていきたい。
学習環境が荒れていると子供の心も又荒れる。
社会 理科 作文 図工 等をした中で 発表に適したものを中心にしながら学習環境を随時 整えていきたい
特に 理科は年間の四季の移りかわりを学習するので その季節にマッチし 学習のかてになり 子供の心をなごやかにするもの等をそなえていきたい。今 鳥 オタマジャクシ ヤゴ エビガニ カメとか 各種の八千草の花がかざってある。こうした事を今後とも工夫していきたい。

こどもの中でこどもとともに考え 解決していこうとする態度

1学期の反省

慌しい動きの中で 一学期も終った。教師生活 新年度第一歩は いそがしいという印象しかの中にくれた。特に感じたのは 子供じしんがなげつけてくる課題にどうこたえるのかということであった。未消化の事柄のものも多々ある。こどもの中で こどもとともに考え 解決していきたい。

2学期の反省

京浜教育ともいうべき教育方法（内容を含んだ）が必要ではないのかという問題にぶつかった。中小工場の密集する本校の特殊性の中で やはりそれに適った方法の教育が必要なのだ。どこでもできる教育では 子どもがうかばれない。とにかく そうした巨大な課題をもあった感じだ。

学年末反省

7. 学年の目標（学校目標の具体化したもの、学年で話し合った努力点など）

楽しく遊びしっかり学ぶ子

3年は児童間の分化が始まり、しきりにブルーピレクが行われる時期である。又学力面にも差がつき始める学年である。
それら3年の特徴を生かす為に楽しく遊び（元気に遊びではなく）しっかり学ぶ子を学年目標としてかかげた。

8 わたしのねらい（学級経営上、特に意図し努力したい点）

例　学習指導の重点、生活指導の重点、環境構成・家庭連絡など

なによりも、自分自身の頭で、真実は何なのかを追求していく力をつくり出してやりたい。
ごくあたりまえのことも、さまざまな角度から、いろいろな事がいい得る。そうしたじゆうなんな思考力そして、感性的認識から理性的認識へ発展しうる力をいかなる教科の中でも追求していきたい。
その中で、個々人が持っているさまざまの才能を開発し、発展させていきたい。
学習指導の効果を更に上げるためにも、否、教育それ自身として重要な領域である生活指導の面でも次のような点を心がけていきたい。正しいことを正しいと言え、悪いことを悪いといえる子そして、その事を実行できる子。
もちろん集団生活をするうえでのさまざまなルール、約束等はそのつど指導していきたいが、生活指導上の重点として、上記に

解説

向山洋一『新卒日記』

井上　好文

一．向山の『新卒日記』

一九六八年四月、向山氏は新卒教師として、大田区立大森第四小学校に赴任した。

この年、新任校長として赴任したのが、後に唯一の師と仰ぐことになる石川正三郎氏であった。

教師になって一ヵ月あまり。向山氏は、日々の教室の出来事の中から、印象的なことを綴りはじめる。

試しに書いたものが、石川校長の目にとまって、暖かく適切な意見を言われたのが、続けるきっかけだったという。

後に『新卒日記』と呼ばれることになるこの日記（草稿）は、途中何度か中断しつつも、一年近く続くことになる。

新卒時代の日記について、向山氏はデビュー作『斎藤喜博を追って』（一九七九・昌文社）の中で、次のように書いている。

> 今、十年すぎて読み返してみると顔が赤らんでくる。気負っていて、内容も拙い。しかし、何かすがすがしい気もする。多くの教師は、やはりその青年教師の時代には、ぼくと同じような心で教育に打ち込んでいたのではないかと思われるのである。

二．実践記録はつけなければダメだ

「やはり、実践記録はつけなければダメだ」から、始まる一九六九年二月二八日付けの「日記」は、強烈である。

向山氏は、

> 「研究」とやらに目が向いて、子ども達に目が向かなかった。

と自戒する。

「先生、□□君ね。昨日班学習で□□君の家の番だったのに、グルグルひっぱり回して、教えてくれなかったんだよ」

「それで、勉強できなかったの」という奥島さんの抗議に、

「家がせまいからね」とべそをかきながら、返事をする□□君。

そのことを予見できなかった自分を向山氏は、

> 俺はどうかしている。なんでこんなことに気づかなかったのか。
> ちょっとすました研究実践きどりがかくも不幸なじたいをうんでしまった。

と猛省する。

新卒の頃から、向山氏は、教室に現れるさまざまな問題や子どもの欠点は、教師としての自分自身の力量不足が原因であると考えていたことがわかる。

三、子どものストライキ起る

一九六八年六月二〇日、事件が起きた。

昼休みの終りのチャイムがなっても、子ども達が一向に教室に帰る気配がない。「いつか遊んでやる」といったのをたてにとって、「先生、もっと遊ぼう」「遊ぼう」と、責めたてる。「教室に入らないなら、そうやっていろ！」

向山氏のあまりの剣幕に、半分くらい教室に戻ってきたものの、残り半分は校庭に残ったままだ。

教室に戻った子どもに、「何をいってもいいらから、同じ班の人を必ず連れてこい」と指示する。

まもなく、ぽつりぽつりと七、八人、戻ってきた。

窓から見ると、それでも、まだ十二、三人残っている。

あの手この手と尽くしたものの、最後まで残ったつわもの男一人に女三人。

最後は、自分で出かけて教室に戻るように頼み込む……。

教室に戻った女の子が叫ぶ。

「なんだよみんなは。どんなことがあたって教室へ入らないとあれほど約束したぁないか。ひきょうだぞ——。」

向山学級の子ども達のたくましさを、新卒時代からすでに垣間見ることができる。

教育新宝島

特典 No.00 ｜ 2023年11月

向山洋一 教育資料

新卒日記

発行日　2023年11月17日

発行所　向山洋一教育技術研究所

所在地　〒142-0064 東京都品川区旗の台２丁目４番12号

谷和樹の教育新宝島
https://shintakarajima.jp

向山洋一公式ウェブサイト
https://mukoyamayoichi.com

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。